

子宮頸がんワクチンの接種率を向上させる方法 ～大学生を焦点にして

柴田学園大学 こども発達学科 福士 章子

TEL 0172-33-2289 FAX 0172-33-2486

e-mail a-fukushi@shibata.ac.jp

キーワード

子宮頸がん HPV (ヒトパピローマウイルス) 子宮頸がんワクチン
定期接種 副反応 積極的勧奨停止 キャッチアップ 大学生

子宮頸がんは子宮頸部と呼ばれる子宮の入り口部分にできるがんで、日本では年間に約1万人が罹患し、約2,800人が死亡している。特に30代から50代の比較的若い世代での罹患の増加が問題になっている。

子宮頸がんの95%以上がヒトパピローマウイルス(以下HPV)が原因といわれている。HPVはごくありふれたウイルスであり、感染しても自然に排除されることがほとんどだが、排除されずに感染した状態だと前がん状態となり、やがてがんになる。HPVは性行為で感染し、男性の性器に常在することが好む。こうしてHPVを保有している男性がまた別の女性と性行為をすることにより、感染が広がる。HPVの種類は200種類くらいの型があるが、がんに関与しているのはハイリスク型と呼ばれる14種類であり、特に16型と18型ががんでの検出頻度が多い。

子宮頸がんを予防する方法として、子宮頸がんワクチンの予防接種がある。無料となる定期予防接種の対象者は、小学6年から高校1年までの女子に限定されている。これは、性行為で感染するので、まだ性行為をしている者が少ないであろう思春期世代を対象にしているからである。

子宮頸がんワクチンが定期接種となったのは、2013年4月からであり、当時は「がんを予防できるワクチンが無料で受けられる」ということで、70%以上の接種率であった。しかし、予防接種を受けたことにより重篤な副反応が起こったという報道があり、社会問題となった。厚生労働省はこの副反応について調査するために2013年6月より子宮頸がんワクチンの積極的勧奨を差し控えるという措置をとった。つまり、接種を勧めるのをやめ、接種の案内を送るのもやめてしまったのである。こうして、子宮頸がんワクチンの接種率は1%未満になり、9年もの月日が経過した。

しかし、近年の子宮頸がんの増加や、調査によりワクチンと副反応の因果関係が認められないことなどを踏まえ、ようやく2022年4月より子宮頸がんワクチンの積極的勧奨が再開することとなった。これまでの9年の間、接種対象者でありながら、予防接種の通知が届かず接種の機会を逃してしまった大学生世代までの人には、期間限定で無料接種の機会(キャッチアップ)が設けられることとなった。

本研究では、大学生女子を対象に子宮頸がんワクチンの接種についてのアンケート調査を行い、どうすれば子宮頸がんワクチンの接種率を向上させることができるかを考察するものである。まだ、調査の途中である。